

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21530804

研究課題名（和文）言語活動の充実を図る「学習の共同化と授業方法」の開発研究

研究課題名（英文）Development" Learning Communities and teaching Methods" attempted substantial linguistic activities

研究代表者

湯浅 恭正 (YUASA TAKAMASA)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号:60032637

研究成果の概要（和文）：言語活動の充実を図る学習の共同化と授業方法を開発し、学習の共同化の要素を抽出し、授業実践の指針を解明した。①言語活動指導の研究動向と言語行為論の総括、②文学の学習の共同化の検討、③教科と生活の言語活動と学習の共同化の検討を行った。その成果、言語活動とリテラシー形成、言語活動の指導・学習の共同化のシステム開発の論点を抽出し、読みの主体形成と共同化、表現と交響空間、意味生成と言語活動の促進等の授業論の視点を解明した。

研究成果の概要（英文）：This study examines the theoretical・practical framework in order to develop learning communities and teaching methods for substantial linguistic activities. Through this work we abstract the factor for the learning communities and clarify the guide on teaching practices. The composition of this study are 3 parts.①Trend review on the study about the linguistic activities teaching,theoretical reiew on the linguistic activities . ② Proved study of learning communities on the literature education(Reading),③Reexamination of linguistic activities and leaning communities on the teaching about life education. As a result we abstract the relation between linguistic activities and literacy formation. And we clarify the viewpoint of teaching theory,namely reading activities and subject formation:dialog and communities:child expression and public space:viewpoint of teaching study to create meaning and promote linguistic activities.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011年度 | 1,200,000 | 360,000 | 1,560,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,300,000 | 990,000 | 4,290,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育方法

1. 研究開始当初の背景

既に開発した「学習の共同化モデル」をも

とにして、言語能力を高めるための授業方法を
開発するとの認識から研究を開始した。言

語活動の核として OECD の提唱するキーコンピテンシーの形成に注目し、「多様な社会グループにおける人間関係形成力」を学習の共同化と授業指導の理論として発展させることが必要であると考えた。

教科教育の次元では、PISA 型の読解力に関連して新しい学習指導要領においても国語科において「読みの指導」が重視されている。しかし、「読みの指導」を学習の共同化の視点から考察し、言語活動の充実に資する授業づくりの方法に関しては未解明の課題が多いと判断した。さらに、算数科や音楽科等の教科指導においても、言語活動の指導は考慮されるべき課題であるが、教科教育学からではなく、教育方法学の視点から学習の共同化を図る研究は少ない。言語活動の背景にある子どもの生活・表現活動を視野に入れて、教科教育の分野に新しい知見を生み出すことが必要であるとの認識であった。

2. 研究の目的

(1)言語活動を充実させるための教育学・教育方法学の理論的枠組みを総括する。言語活動とリテラシー論・言語哲学・言語心理学の潮流を踏まえながら、そこに学習の共同化論の論点を抽出する。

(2)言語活動の充実に資する「学習の共同化と授業方法」を開発するための実践的枠組みを総括する。国語科教育における言語活動の中でも、読みの指導論を取り上げて、学習の共同化のための論点を検討する。さらに算数科・理科等の教科教育における言語活動論と学習の共同化との関連を検討する。

(3)「学習の共同化と授業方法」を実証的に開発し、授業づくりの論点を整理する。(1)及び(2)によって得られた理論的・実証的総括に基づいて授業研究を実施し、開発する授業方法の有効性について、さらに授業研究を通して実証する。

3. 研究の方法

(1)近年におけるわが国の教育方法学・教科教育学における言語活動と「学習の共同化」論の理論的成果を分析した。また言語活動の基礎論として伝統的言語学・新言語学・ヴィゴツキー・エンゲストローム論の研究成果を分析し、さらにオースチン・サール・ハーバマスにおける言語行為論を取り上げて、その理論的成果を検討した。

(2)わが国における代表的な「読みの指導」の理論的・実践的研究団体(科学的読みの授業研究会・日本文学協会国語部会・児童言語研究会・文芸教育研究協議会・語り合う文学教育の会)を取り上げて、「学習の共同化」の

視点から検討した。主として「語り合う文学教育の会」の理論と実践に注目し、授業の参与観察・教師への聞き取り調査を通して授業づくりの論点を検討した。

(3)言語活動の背景にある子どもの表現・生活に注目した授業実践について参与観察・聞き取り調査を実施し、授業づくりの論点を検討した。

4. 研究成果

(1)言語活動の指導の背景にある理論では、リテラシー形成・言語活動の充実に図る上で、文化・社会の側からの接近と、学びの主体である子どもの側からの接近をどう考えるのか、学習と授業における主体と共同のあり方を論点として抽出した。その上で、研究動向の総括を通して、教科の枠を越えた言語活動の意義、言語活動のリテラシー形成における政治性を論点として抽出し、それを基にした学習の共同化モデルの意義と必要性を論証することができた。

言語活動の議論にかかわって、この分野に困難さのある「特別なニーズ」論も取り上げて、研究課題を総括した。そこでは、言語活動の基盤としての学級の意義、教科教育論と特別ニーズ教育論の結合、特に国語科における言語活動の困難さの理解とそれを学習の共同化に結合する論理の解明を論点として抽出することができた。

次に、言語活動の基盤にある言語行為論を検討し、そこでは、言語における意味の理論及び語用論を踏まえること、言語行為における発話・談話の分析を通して、学習の共同化に資する授業方法の開発が可能であること、言語活動を通して、学習の共同化を構成するための活動システムと形態を創出する意義と方向性を導き出した。

これらを踏まえて、①言語行為が社会的文脈・状況の中で他者とのコミュニケーション的関係を通して遂行され、言語行為を技能レベルの把握に解消することなく把握する意味を解明した。

また、②言語行為を関係性の次元だけで捉える傾向を批判し、発話行為と命題内容との関係を問い、言語活動を教科内容と結びつけて捉える意義を論証した。

さらに、③言語行為が、相互主体的な承認によるコミュニケーション的行為によって遂行され、言語活動が教科内容の意味の共同構築、そのための共同関係の調整と構築、ありのままの自己の表明と自己へ省察の層的重なりから追求される必要性を解明した。

(2)以上の基礎的研究を踏まえて、国語科・読解力の指導に焦点を当て、文学の読み・言

語活動における主体の位置づけと学習の共同化を基本的な論点として設定し、読みの主体形成に力点を置いた言語活動が学習の共同化に発展するための授業方法の条件、読み手の内部に文学の「言葉」を形成し、対自・対他の対話という共同化を図り、言語活動を促す指導の論点を抽出した。

東京・成蹊小学校、お茶の水女子大学付属小学校、名古屋市鳴海南小学校、奈良教育大学付属小学校、三重県尾鷲市・尾鷲小学校における授業の参与観察・聞き取り調査を実施した。

本研究では主として「語り合う文学教育の会」(以下、「語り合う会」)の検討を通して、①読みの主体の背景にある読者論の意味を解明し、文学を読み手主体のものにする指導論、子どもの自立に資する指導論、教師の成長を促進するという要素を抽出し、読解主義的読みを克服する論点を解明した。そして、他方、読みの相対主義を越える論点を抽出することができた。さらに、価値葛藤に力点を置く読みの過程とそこにおける当事者の位置づけ(文学作品の文脈に即しながら自己の生活現実のコンテクストに立脚して、教材を読んでいくという読みの当事者性)、自己の自立・生き方の物語を批判的・共同的に問い直す当事者性、文学作品を新しく読み直す当事者性(作品を新しく解釈し直す当事者性)が言語活動の指導論の課題であることを解明した。

②以上の検討を踏まえた「ごんぎつね」の授業研究を通して、言語活動と学習の共同化の要素を解明した。それは当事者性のある読みと共同論、「子どもの内なる文学作品」のせめぎあいと共同という要素である。この要素を含んだ学習の共同化は、授業指導の論点でもあることを解明した。

③比較研究として本研究では「科学的読みの授業研究会」(以下、「読み研」)における学習の共同化と自立論についても検討を進めた。

比較において第一に浮き彫りにされたのは、子どもの自立の捉え方の相違である。「読み研」は教師によって国語指導の違いがあまりにも大きい状況から、どの子どもにも確かな国語力の形成を課題に上げて、しかも、ゆくゆくは教師の指導がなくとも自力で読む力を形成することを主な研究課題としてきた。これに対して、「語り合う会」では、文具作品との対決や他者との読みの交流を通して自己の生き方を問う「自立」論が特徴である。自立論と言語活動を考察する論点を抽出することができた。

第二は学習の共同化を捉える視点の相違である。「読み研」においては、子どもたち

の教材解釈の対立・分化を重視しているが、それを鮮明にする手段として班・グループが位置づけられていた。また、教材研究に基づいて、教師が子どもの対立・分化から統合へと導く過程に重点が置かれていた。先に特徴づけてきた「語り合う会」における共同化論との違いが明瞭に示された。

ただ、「読み研」においても、「語り合う会」のような子どもの生活のコンテクストと学習のコンテクストを関連づけようとする指導論も意識されていたが、現実の子どもの問題意識・生活により深く介入した学習過程の構想論は弱く、この点でも「語り合う会」との違いが発見できた。

(3) 言語活動の指導を国語科以外の教科教育論として検討し、算数科・音楽科の指導を取り上げた。埼玉県上尾市・原市小学校、お茶の水女子大学付属小学校における授業の参与観察と聞き取り調査を実施した。その結果、教科と生活を結合した学習過程論の中に学習の共同化の論点を抽出することができた。

①算数科においては、まず第一に、学習の共同化を育む学級指導の意義が示された。生活の場面で傷つけられてきた現代の子ども理解を基盤にして、「学びのバイパス」論など、系統的な学習が要請される算数科において多様性を許容し、「否定的な考え方」が受け入れられ、学びの関心を促進する共同化の論理が位置づけられていた。こうした共同論の基盤には、他者の思いに出会いつつ事実を正確に把握する「言葉」への着目があった。

こうした共同化論には常に何らかのメッセージを表現する主体として子どもを理解する教育観、算数の教科指導を通して、自己と他者を発見するという共同論が論理として位置づいていることを解明することができた。

第二は算数科の学習の共同化の論理には新しい概念の習得と教科の論理が裏打ちされていることが重要な要素として位置づいていた。共同論を情緒的一体感として議論する立場への批判的視座が示されていた。そうであればあるほど、学習において子どもの言語により注目し、学習の共同化における実存・感情の課題に注目することの意義を解明することができた。

②音楽科における言語活動論を本研究ではシティズンシップ教育論と関連づけて解明した。

まず、音楽科における言語活動をめぐって中央教育審議会答申(2008)の位置を検討しながら関連学会における議論を考察した。これらの検討を通して、音楽に関する知識・理解の教育の発展につながる言語活動の探究

が主たる課題として示されていることを指摘した。

続いてお茶の水女子大学付属小学校におけるシティズンシップ教育論を取り上げて、その中核である「公共性リテラシー」の意義と音楽科におけるその位置づけを検討した。その結果、「私の表現」「異なる他者の表現」等の公共性論を背景にした言語活動の指導が意識されていることを解明した。

さら音楽科における表現活動の授業研究を通して、以下の点が解明された。○異なる意見が多様に出されること、それらの意見を平等に検討していくことに価値を置く指導論が位置づいていること、○話し合いの焦点となる学習課題を探す時や表現の探究において、「聴き手」「観客」の立場から思考活動を促すことを意識化させていること、○表現者の気持ち・感情を重視することを通して、表現の自由を問うことと、集団で音楽を表現する際の「規範の正当性」を問うことという二つのアプローチに留意すること。

以上の検討から、音楽科における言語活動の充実、表現の自由を尊重しつつ、音楽表現を共同して追究する空間の創造を課題としていることが論点として抽出できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 24 件)

- 1 久田敏彦、大阪教育基本条例批判、全国高校生活指導線研究協議会編『高校生活指導』第 192 号、46-53、2012、査読無
- 2 湯浅恭正、言語活動の指導と学習の共同化、大阪市立学大学院教育学専修編『教育学論集』37 巻、34-48、2011、査読有
- 3 湯浅恭正、通常学校の改革と授業づくり、全国障害者問題研究会編『障害者問題研究』Vol.39, No.1、12-19、2011、査読有
- 4 福田敦志「言葉を奪われた子ども」と生活指導論の課題、大阪教育大学大学院学校教育専攻編『教育学研究論集』第 8 巻、1-8、2011、査読有
- 5 上森さくら、協働的関係を構築しようとする教師の働きかけの戦略、大阪市立大学都市文化研究センター編『都市文化研究』13 号、13-21、2011、査読有
- 6 久田敏彦、「学童保育」理解の視点の多重性、日本学童保育学会『学童保育』第 1 巻、29-36、2011、査読有
- 7 福田篤志、「子どもの声」をききとる、全国生活指導研究協議会編『生活指導』690 号、42-49、明治図書、2010、査読無
- 8 湯浅恭正・村瀬ゆい、子どもの生活現実

に取り組む教育方法、日本教育方法学会編『教育方法・34』、45-167、図書文化、2010、査読無

9 久田敏彦、学級を問い直す、岩垣攝・子安潤・久田敏彦編『教室で教えるということ』八千代出版、89-131、2010、査読無

10 久田敏彦、学ぶこと・生きること・つながること、日本生活教育連盟編『生活教育』741 号、111-128、2010、査読無

11 船越勝、他者との信頼関係を経験してこなかった子どもと集団づくり、『和歌山大学教育学部附属教育実践センター紀要』20 号、85-90、2010、査読有

12 船越勝、奈良教育大学附属小学校における教科の本質と共同を大切にしたい授業づくり(上)、和歌山大学学芸学会編『学芸』57 号、45-50、2010、査読有

13 船越勝、奈良教育大学附属小学校における教科の本質と共同を大切にしたい授業づくり(下)、和歌山大学学芸学会編『学芸』57 号、51-56、2010、査読有

14 平田知美、発達を導く「介入」に関する一考察—ダイナミック・アセスメント研究における議論を手がかりに—、『和歌山大学教育学部紀要』第 61 集、111-132、2010、査読有

15 平田知美、「びらいち」で協働的に実践をつくる、全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』188 号、22-30、2010、査読無

16 福田敦志、教育方法の歴史と展開、西川信廣・長瀬美子編『学生のための教育学』、26-35、ナカニシヤ出版、2010、査読無

17 福田敦志、学び合う関係づくり、全国生活指導研究協議会編『生活指導』678 号、42-49、明治図書、2010、査読無

18 福田敦志、活動を通して出会うものと立ち上がる世界、全国生活指導研究協議会編『生活指導』683 号、42-49、2010、査読無

19 湯浅恭正、特別支援教育における授業づくり研究の枠組み、大阪市立学大学院教育学専修編『教育学論集』35 号、1-11、2009、査読有

20 湯浅恭正、特別支援教育と授業研究、日本教育方法学会編『日本の授業研究下巻』、学文社、165-175、2009、査読無

21 福田敦志、学びの共同化を実現する授業・学級づくり、湯浅恭正編『自立への挑戦と授業づくり・学級づくり』明治図書、41-54、2009、査読無

22 福田敦志、今井理恵、上森さくら、学習の共同化論の枠組みに関する検討—学習集団論・学びの共同体論を中心に—、日本生活指導学会編『生活指導研究』26 号、131-158、2009、査読有

23 久田敏彦、学級づくりと授業研究、日

本教育方法学会編『日本の授業研究下巻』、学文社、107-116、2009、査読無

24 船越勝、生徒の自立を育てる生活指導の体制と学校づくり、和歌山大学学芸学会編『学芸』56号、91-98、2009、査読有

〔学会発表〕(計8件)

1 今井理恵・上森さくら・久田敏彦・船越勝・長瀬美子・平田知美・湯浅恭正、福田敦志、文学の読みを介した学習の共同化、日本教育方法学会第47回大会、2011年10月2日、秋田大学

2 上森さくら、生活指導における教師の成長、日本教育方法学会、第47回大会、2011年10月2日、秋田大学

3 福田敦志、ペスタロッチー教育思想における「共同体」構想の再検討、日本ペスタロッチー・フレール学会第29回大会、2011年9月2日、常磐会学園大学

4 平田知美、発達を導く「介入」に関する一考察、日本教育方法学会第4回大会、2010年10月9日、国土館大学

5 久田敏彦、「学童保育」をとらえる視点の多重性、日本学童保育学会第1回大会、2010年6月19日、静岡大学

6 湯浅恭正、子どもの生きづらさと学校保健、日本教育保健学会、第7回大会、2010年3月27日、びわこスポーツ成蹊大学

7 今井理恵インクルーシブ教育実践の理論的枠組み、日本教育方法学会第45回大会、2009年9月27日、香川大学

8 湯浅恭正、通常学校における特別支援教育、日本教育心理学会第51回総会、2009年9月22日、静岡大学

〔図書〕(計9件)

1 湯浅恭正、新しい時代の教育の方法、ミネルヴァ書房、187、2012

2 湯浅恭正、気になる幼児の保育と遊び・生活づくり、黎明書房、102、2011

3 湯浅恭正、子どものすがたとねがいをみんなで、クリエイツかもがわ、150、2011

4 湯浅恭正、発達障害児のキャリア形成と授業づくり・学級づくり、黎明書房、100、2011

5 湯浅恭正、自閉症児のコミュニケーション形成と授業づくり・学級づくり、黎明書房、106、2011

6 久田敏彦・福田敦志、「気になる」子どもへの呼びかけ、せせらぎ出版、189、2009

7 湯浅恭正、芽生えを育む授業づくり・学級づくり、明治図書、147、2009

8 湯浅恭正、子ども集団の変化と授業づくり・学級づくり、明治図書、146、2009

9 湯浅恭正、自立への挑戦と授業づくり・学級づくり、明治図書、151、2009

6. 研究組織

(1) 研究代表者

湯浅 恭正(YUASA TAKAMASA)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60032637

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

久田 敏彦 (HISADA TOSHIHIKO)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70135763

船越 勝 (FUNAKOSHI MASARU)

和歌山大学・教育学部・教授

研究者番号：60199411

長瀬 美子 (NAGASE YOSHIKO)

大阪大谷大学・教育学部・教授

研究者番号：502478898

福田 敦志 (FUKUDA ATUSHI)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10325136

今井 理恵 (IMAI RIE)

日本福祉大学・福祉学部・准教授

研究者番号：30611157

平田 知美 (HIRATA TOMOMI)

和歌山大学・教育学部・講師

研究者番号：20554083

上森 さくら (UEMORI SAKURA)

大阪市立大学・大学院文学研究科・特任講師

研究者番号：30623409